

文化とパーソナリティ

藤 本 浩 之 輔

Culture and Personality

FUJIMOTO Kounosuke

I 文化とは何か

ドイツ語の Kultur は、17世紀末頃、Cultur という綴りで現われてくる。それは、耕作を意味するラテン語の cultus、あるいは cultura から借用されたものであって、そもそも精神的教養を意味する用語であった。したがって、ヨーロッパでは今日でも、教養とか価値のあるものというニュアンスをこめた用法が根強い。日本語の文化は、Kultur の訳語として当てられたため、文化国家、文化人、文化勲章などの用法にもうかがえるように、Kultur と同様の意味で用いられてきた。

それに対し、19世紀末、イギリスの人類学者タイラー (E. Tylor) の登場、20世紀初頭のアメリカにおける文化人類学の発達によって、culture は教養のあるもの、価値あるものに限らず、風俗・習慣や日常の生活の仕方まで広く包含して用いられるようになった。英語の culture には、そういうニュアンスが強い。

文化人類学をはじめとする社会科学においては、もっぱら後者の意味で用いられているが、今日では、その用法は次第に一般化してきているといえよう。

ところで、文化という用語は、初めに明確な定義があって出発したものではなく、実証的な研究が積み重ねられ、文化という用語が用いられながらその概念が明確になっていくという経過をとっている。クロウバーとクラックホーン (A. L. Kroeber and C. Kluckhohn) は、『Culture—a critical review of concepts and definitions』(1963) を著して、160余にのぼる culture の定義を集めて論評しているほどである。

そのクラックホーンは、文化を定義して次のように述べている。「文化とは、歴史的に形成された、顕在的、潜在的な生活に関する様式の体系であって、ある集団の全員または特定の成員に共通に保有されているものである」¹⁾。よく引用されるもので、要領のよい定義だといえよう。

ここでいう「顕在的、潜在的な生活に関する様式」(explicit and implicit designs for living) が何を指しているかは、彼の次のような記述的な定義に示されている。「文化とは、社会の成員によって獲得された生産物、信念、芸術、その他すべての習慣をふくめた複合的全体である。つまり、これらの習慣によってつくり出された人間活動の全産物である」²⁾。また、さらに詳しく文化の内容にふれて、「書物、絵画、建物など；人間環境と物理的環境の両方に適応するための様々の知識；時代を通してつくりあげられてきた言語、習慣、エチケットの体系、倫理、宗教、モラルなど」³⁾ とも言っている。

文化の構造に配慮してすぐれた定義をしたのはリントン (R. Linton) であろう。彼は次のように述べている。「一文化とは、習得された行動と行動の諸結果の綜合体であり、それらの構成要素が、ある特定の社会の成員によって共通に持たれ、伝達されているものである」⁴⁾。ここにいる「行動の諸結果」(results of behavior) を説明して、リントンは、行動の結果として産みだされた物質的生産物 (文化の overt な側面)、および心の中に蓄積された知識、態度、価値観のような心理状態 (文化の covert な側面) の両方を意味すると述べている⁵⁾。クラックホーンは、この overt な側面を explicit なもの、covert な側面を implicit なものと表現しているわけで、つまるところ、クラックホーンもリントンも文化に対してほとんど同じ定義を下しているといえよう。

こうして、リントンもいうように、文化には、①overt なものとして観察しうる行動様式、②overt な存在としてある物質的生産物、③covert なものとして人間の心の中に内在する知識、信念、信仰、価値観などの3種類の現象が含まれるのである⁶⁾。

なお『教育人類学』(Educational Anthropology) を著したネラー (G. E. Kneller) も全く同じ考えを示して次のように言っている。「文化というのは、社会の人々によって発展させられてきたすべての生活様式である」。そして、文化様式として、①学習され、共通にもたれている諸活動 (ドライブすること、デートすること、劇場へ行くことなど)、②学習され、共通にもたれている諸観念 (神への信仰、共産主義への敵意など)、③社会的に獲得された生産物 (自動車、摩天楼など) の三つをあげている⁷⁾。

横道にそれるようだが、文化と類似した用語である文明も一般的に用いられているので、この二つの概念の異同についてふれておきたい。文明 (civilization) という言葉は、ラテン語の civis (市民)、civitas (都市) に由来するものであるし、日本語においても、機械文明、文明の利器、都市文明、近代文明などと用いられることからわかるように、文化が土着的なニュアンスを含むのに対して、文明は新しいもの、技術的なもの、都市的なものといったニュアンスが強い。

しかし、これら2つの概念は截然と区別されるものではなく、文明は文化の一部、つまり文化の下位概念であると私は考える。一社会の文化を考えてみた場合、日常の伝統的な生活様式にかかわる基層文化と技術的な改良や発明にもとづく表層文化に分けてみると、文化はその両者を含んだ全体であるのに対し、文明は、その表層文化を指して言うのである。また、文明は、文化の意識的、計画的部分と言ってもよい。したがって、文明は近代的で普遍的な性質をもつが故に、他の社会から移植し、学校などの教育制度によって意図的に伝達するということが可能である。わが国の明治維新を特徴づける言葉に「文明開化」があるが、当時、西欧から移植えられた文物は、その意味で文明と言い得るものであった。しかし、それらの新しい文物も、伝統的な文化と結び合わされ、融合され、次第に伝統的文化に同化されていくのであって、例えば、われわれの生活の中にある洋服、靴、パン、肉料理などはそういった性質のものであろう。文化と文明の区別は論理的には可能であるが、具体的にはかなり不明であるといえる。以上のような理由で、ここで文化という場合、文明を含めた包括的な意味で用いるのである。

本論は、文化と行動やパーソナリティとの相互関連について考察するものであるが、それに先だって、文化に関する重要な論点のいくつかについて私の考え方を述べておきたい。

〔1〕 行動と行動の諸結果としての文化

先にリントンの定義を引用し、文化とは、一社会の成員によって習得された行動と行動の諸結果であり、その中には、行動の様式、行動の結果としての物質的生産物、および人間の内部に蓄積された観念形態、その3種の現象が含まれると言った。

これに対し、文化とは、行動や文物そのものではなく、それらの背後にある理念的なもの、外的に表現された諸個人の行動や文物から抽象された観念的なものとする考え方がある。この考え方は、1930年代の頃からアメリカの代表的な人類学者達の発言として出てきたのであるが、現在でもボック (F. K. Bock) のようにこの立場をとる人類学者もいる。彼は「文化は、ある人間集団の成員の行動に影響を及ぼす期待、了解、信仰、あるいは同意のすべてを含む」とし、「われわれは文化を見ることはできない。しかし、観察可能な事物の形態と分布の規則性から、＜慣習的了解＞が実際に存在していたことを推理することはできる」と述べている⁹⁾。

また、姫岡勤氏も、「われわれは、外部に表現せられた個人の行動や文物を通してでなければ、文化を知りえないとはいえ、文化そのものをわれわれは直接に観察することはできないのである。それは、行動や文物の背後にある理念的なものである」として、くり返し、文化は観念的な構成体であることを強調している⁹⁾。

このように、文化の中に行動や物質的な生産物を含めるか否かということは、文化人類学者の間でもなお議論の分かれている問題点であるが、私が上述のように3種の現象を含めて考えようとするのは、次のような論拠による。

①そもそも、文化という言葉が用いられはじめた時から、物質的生産物は慣用的に文化の中に含まれてきた。例えば、われわれが「縄文文化」とか「弥生文化」という時、壺の背後にある知識や観念のみではなく、壺自体も文化の重要な構成要素として考えている。物質的生産物もまた、文化総合体の欠くべからざる部分と言わなければならない。

②行動様式や物質的生産物としての文化と、観念としての文化を区別して考えることはできるが、それは主として論理上の問題であって、現実には、観念と行動や文物は分かち難く結びついている。例えば、知識について考えてみても、それが言語行動や書物やフィルムに表現されなければ、他人に伝達することも影響を与えることもできない。もちろん発展させることもできないわけだし、結局のところ動物における同じレベルの知識でしか有り得なくなるであろう。

③国旗などの象徴物、神や仏などの偶像、交通規則の標識といった物について考えてみると、確かに、これらの物が意味をもつのはその背後にある観念の故である。しかし、観念は物が存在しないところには表出され得ないのであって、物の存在もまた、人間の行動、思考、感情に対して影響を与える重要要因なのである。物を省くことは、フィールド・ワークの際には損失がきわめて大きい。

④子どもの発達研究、パーソナリティ研究の上からは、物は不可欠な文化要素であろう。例えば、東日本でよく用いられてきたエジコ（乳幼児が動き回らないように入れておくワラ製や木製の育児用具）やアメリカ・インディアンのナバホ族やアパッチ族の間で用いられる cradle board（乳幼児を板の上に寝かせた状態で紐でぐるぐる巻きに固定して背負う用具）など、そういう用具を用いないで直接に抱いたり、おんぶしたりする場合に比べて、物自体が子どものパーソナリティ形成に何らかの影響を及ぼすと考えられる。また、玩具の有無やその種類、家屋の構造や素

材といったものも、子どもたちのいろいろな経験を左右し、パーソナリティ形成に一定のかかわりをもつことは否定できないであろう。

〔2〕 文化と自然

われわれは、自然というものは文化の対極にあって、文化と相入れないもの、あるいは文化に対立するものと考えている。しかし、それは観念としての自然であって、現実の自然とはそういうものではない。

第一に、われわれが通常接している自然環境というのは、農・山・漁村であり、その背後を形成している山野、川、湖、海などである。それらは長年にわたり人間の手が加えられて、意図的に変化させられてきた自然である。その自然の中に生育している植物や動物もまた、長年にわたる人為に対して適応した自然である。つまり、それらはすべて文化的に変化させられた自然である。日本のように狭小で、文明の発達した国では、文化的に変化させられていない wild な自然というのは殆んどないといってよいであろう。

第二に、文化的に変化させられた自然であろうと wild な自然であろうと、われわれがそれらに接触する時は、まる裸の人間としてではない。様々な文化的装置を通してである。つまり、労働にしろ、レクリエーションにしろ、そのための諸道具をたずさえているし、衣服をつけ、靴をはき、食物も持参しているであろう。したがって、自然との接触から得る影響は、それらの文化的装置によって屈折するのであり、装置の性質の相違によって屈折のしかたも異なるのである。

第三に、われわれが自然からどういう影響を受けるかは、その上さらに、われわれが自然をどう解釈し、意味づけるかということにかかっている。太陽を神として崇拝するか、悪魔として憎悪するか、山を信仰の対象として考えるか、征服すべき土地の高みと考えるか、動植物を人間と同等の生命体と考えるか、利用すべき手段と考えるかなどによって、自然に対する時の態度も行動も違って来るだろうからである。

われわれは、普通、相互作用する環境を社会環境と自然環境の2つに分けて考える。それは、社会環境が文化的につくられた環境であるのに対して、自然環境は文化の対極にあるものとの考え方による。しかし、以上のように考えてくると、自然の中にも文化は深くはいりこんでいることがわかる。この意味で、自然環境もまた文化としての環境であると言えるであろう。

〔3〕 文化と人間

エンゲルス (F. Engels) が『猿が人間になるについての労働の役割』(1876) の中で指摘したように、人間は自らの環境に働きかけて変化させ、文化をつくりだす。変化した環境や文化は人間の存在の条件となり、人間に逆に働き返して人間を変化させる。そのような相互作用の連続が現在のわれわれをつくりだしているのである¹⁰⁾。このことは、文化が自然の中に入りこんでいると同時に、人間自身の中にも入りこんでいることを示している。文化は、人間の体の中にも心の中にも入りこんでいるのである。しかも、その入り方はわれわれが考えている以上に深く、文化は根底から人間を規定しているといえる。次にそのいくつかについて例証してみよう。

①現在、日本人や西欧人の大多数は右手利きである。その理由として、人間の心臓は左にあるので脳の左半球の血液の還流がよくなり、その結果左半球がよく発達する。左半球が体の右半

分を支配しているので、右側が発達するという生理学的要因があげられてきた。この説明によると、右利きは生得的なものということになるが、祖父江孝男氏によると、右利きも文化の産物であるという。すなわち、チンパンジーの研究ではどちらの手が利き手かという結論は出せないように、上述の生理学的説明ではうまくいかない。無文字社会の例では、ポリネシアや台湾東岸のアミ族のように右手を神聖視したり、イスラム諸国のように左手に対するタブーをもっている文化では、右利きが一般的である。逆に、オーストラリアのウォロウ族のように左利きは幸運とされ、一段と高い価値が与えられている文化もある。また、ソロモン群島の原住民の調査例では、両手利きが最も多いという報告もある¹¹⁾。

右手の神聖視や優越視がなぜ生じたのかはよくわからないし、多少の生理的条件も否定できないように思われるが、人間の場合は、そのわずかの相違が右手優位の文化をつくりだし、それが人間の体に反作用を及ぼしていく。文化を発達させてきた社会では、そういう相乗作用の継続によって、現在みられるように、左右の手の間に大きな機能的変化が生みだされてきたと考えられる。

②食、睡眠、呼吸、排泄といった生理的欲求（第一次的欲求）は生命維持に直接関係しており、生得的な欲求である。こういう欲求には文化は入りこみようがないと思われるかもしれないが、そうではない。

例えば、食欲の場合でも、どのような物を食べるか、1日何回の食事をするかは文化によって異なっている。われわれ日本人は犬に対して食欲を催すことはないが、犬を好んで食べる文化がある。われわれがおいしい食物だと思っているタコに、食欲どころか恐怖を感じる文化もある。アフリカやアジアの無文字社会では、たいてい1日2回の食事だが、日本の農村では、かつて1日4回から5回の食事をとっていた。前者の文化に属する人々は1日2回の空腹しか感じないが、後者の場合、人々は1日4～5回の空腹を感じるのである。また、われわれは、それまで食欲を意識しなかったにもかかわらず、好きな食物に出会ったとたんに食欲を覚えるというような経験を度々しているであろう。

これらは、文化が生理的欲求を引きだしてくる例である。生理的欲求も文化によって大きく規定されると言えるのである。

③従来、人間の普遍的本性のように考えられてきたものも、実は文化によって規定されることが明らかにされてきた。その例として、ミード (M. Mead) の諸研究をあげることができる。ミードは、『サモアの思春期』(Coming of Age in Samoa-1928) において、サモア島の少女たちの生育の過程を調査・分析したのであるが、その際焦点におかれたのは、文明社会に共通に存在する青年期の危機、青年の悩みというものがないのはなぜかということであった。その原因として、サモアの子どもたちは大家族の中で育てられるため、愛情の対象がひろいこと、性の経験に対する寛大さがあって、青年期における悩みやショックがないこと、画一的な価値体系のため選択する悩みがないことなどがあげられた。そして、青年期の問題は、人類に普遍的な現象というよりは、文明社会の文化的条件にもとづくものであることが指摘されたのである¹²⁾。

また、ニューギニアの調査にもとづいて書かれた『三つの未開社会における性と気質』(Sex and Temperament in three Primitive Societies-1935) では、3つの部族における男性と女性の性格を比較し、その相違を育児の方法と関連させて説明している。男女共に女性的なアラペシ

ユ族、男女共に男性的なムンドグモール族、文明社会とは逆に、男が女性的で女が男性的なチャンプリ族の例をあげて、それまで本性的、生得的とされていた男女の性格は、文明社会の文化的条件によって大きく規定されていることを明らかにして大きな反響を呼んだのであった¹³⁾。

以上のように、右利きと左利き、食欲に生じる相違、男性らしさと女性らしさなどの例を考えてみると、文化というものは、人間の生の奥深くまで入りこむものであることがわかるであろう。人間の行動やパーソナリティ形成における文化的要因の研究は、きわめて重要な位置をしめているのである。

Ⅱ 文 化 型

特定の個人についてみると、くり返し現われる類似の状況では、だいたい似たような行動をとるであろう。また、一社会の人々が、一定の状況においてとる行動も類似性が高いものである。それは、その社会の成員となれば、一定の状況において人はどのように行動すべきかについての共通の見解をもっていて、その見解にそって行動すると共に、他人にもそれを期待するからである。そのような行動の仕方（標準）を文化型（culture patterns）と呼ぶのである。総体としての文化は、このような諸文化型の多少とも組織をもった集合体である。

文化型という言葉を使う時、すぐ思いつくのはベネディクト（R. Benedict）の著書『文化の型』（Patterns of Culture-1934）であろう¹⁴⁾。しかし、私がここでいう文化型とベネディクトのいう文化の型には相違がある。まず、ベネディクトのいう文化の型について簡単にふれておこう。

彼女は、北米ニューメキシコ州に住むプエブロ・インディアン（ズニ族）、北米平原地帯に住む平原インディアン、北米の西北部大平洋沿岸に住むクワキウツル・インディアンなどの調査を通して、それらの文化を型に分けることをこころみた。その時に用いたのが、ニーチェがギリシャ悲劇の研究の中で唱えた「アポロ型」と「ディオニソス型」という2つの型である。ニーチェは、あらゆる芸術の発展はこの2つの精神的性向にもとづいているというのである。アポロ的性格というのは、ギリシャ神話の中の太陽の神アポロのもつ特性で、おだやかで、競争心なく、中庸をもって生活原理とする型である。それに対してディオニソス的性格というのは、酒の神であるディオニソス（またの名をバックス）にちなんだもので、荒々しく、闘争的で、優越を最高の徳とする型である。

ベネディクトは、プエブロ・インディアンがお互いに競争し合うことを嫌い、おだやかな性質をもっているところから「アポロ型」の典型にあげ¹⁵⁾、これに対して、闘争心旺盛で、猜疑心の強い平原インディアンやクワキウツル・インディアンなどを「ディオニソス型」の典型としたのである。この場合、彼女の関心の焦点は、文化全体の性格を把握することであった。つまり、「アポロ型」とか「ディオニソス型」という類型は、その社会の成員の様々な行動様式から最高度に抽象して得たその文化全体の中心の特徴に言及したもので、エトスとも呼ぶべきものであった。

ところで、本論における私の関心は、ベネディクトのこのような文化全体の中心の特徴にあるのではなく、文化というものが個人の行動やパーソナリティにどうかかわり、規定するかという点にある。その観点から文化の性質を考えていく場合、リントンの提示した文化型に関する分析的考え方がきわめて重要だと思われるので、彼の所論にしたがって検討を加えてみたい¹⁶⁾。

リントンは、文化型に関して「現実的文化型」(real culture patterns) と「典型的文化型」(culture construct patterns) の二側面を区別して考えることの論理的重要性を説いている。前者は、具体的な状況において、人々が現実におこなっている行動の仕方の範囲を指す概念であり、後者は、研究者がそこから抽象して、文化の記述や操作の道具として用いるための概念である。ほとんど常に、この二つの側面を混同していたために、文化人類学者や心理学者のみならず、文化について論じてきた論理学者や哲学者に至るまで、解決のない混乱にまきこまれたのであるとリントンは言う。

〔1〕 現実的文化型と現実的文化

先に、文化型とは、どのように行動すべきかの見解にもとづいておこなう行動の仕方であると言ったが、それをもう少し詳しく考えてみよう。

例えば、食事の場合、われわれは一般に、3食のうちの1食を昼間12時前後にとる。その時刻は、各個人によって多少異なるし、同じ個人でも日によって違いがある。時刻の尺度の上に並べてみると、多様な変異を示すであろう。しかし、大多数の人々の昼食時刻は、しぜんに一定範囲の時間内にはいつてくるだろうし、それが昼食であると社会的に認められる限界もある。道で目上の人に会った時の挨拶の仕方の場合を例にとってみても同様で、一社会の成員であれば、バリエーションはあるだろうが、類似性があるし、社会的に是認される限界もあるであろう。

このように、社会的行動ならば、正常な行動の範囲というものを考えることができるのだが、その限界は社会的是認や否認という社会的裁可 (sanction) によって決められる。壺などの生産物ならば機能や利用価値、弓などの飛道具であれば力学的原理、言葉ならば文法なども規準となって決められるであろう。そして、それらの行動の仕方の限界は、文化的に規定されるので、現実的文化型と称するのである。現実的文化型は、一定の仕方による行動ではなくて、一定の範囲内における一連の多様な行動である。

現実的文化型が数多く集まり、程度の差はあれ相互に調整され、組織化されて、綜合体としての現実的文化 (real culture) が構成されるのである。

〔2〕 典型的文化型と典型的文化

上に述べたように、現実的文化型は多様なもろもろの行動を含むものであるから、文化を記述する際に、文化型を構成している諸行動を1つ1つ列挙するというようなことは不可能である。ここからここまでという形で、範囲を示すことさえ繁雑である。そこで研究者は、文化を理解しやすい形でとらえるためにも、一つの現実的文化型を代表する典型を抽出して、それを指標として設定しなければならない。指標には、その型の中の最頻的なもの (mode) を使用するのである。

先にあげた昼食時刻の例で言えば、大多数の人々の昼食行動が11時から1時半までの範囲にはいり、最頻的な時刻が12時半だとするならば、前者が現実的文化型であり、後者が典型的文化型なのである。

したがって、典型的文化型は研究者が construct したものであり、理念的なものである。そのようにして構成された典型的文化型が組み合わされ、組織化されて、典型的文化 (culture

construct) がつくられる。それ故、典型的文化は、現実的文化のすべてと一致するものではないが、近似的に代表するものである。

さてそれでは、典型的文化型及び典型的文化の有効性をどんなところに認めることができるであろうか。

①上述したことからもわかるように、それらは研究者が文化の論理的操作のために用いる道具である。それによって、社会の文化を記述することができ、現実的文化の構造やそれを構成しているもろもろの現実的文化型の相互関係を理解することができるということである。あるいはまた、一社会の成員が、ある一定の状況においてとる行動をかなり正確に予測することができるのである。

②子どものパーソナリティ形成を考えてみた場合、重要な影響を及ぼすのは、子どもをとり巻く日常的な人間環境である。特に、子どもに向かっておこなわれたり、模倣の対象となるような人間行動は、子どもの反応を引き起こす刺激状況としてきわめて重要な意味をもつ。

そういう他人の行動というものは、先に述べたように現実的文化型を形成しているのであって、多様性があるとはいうものの、最頻値（典型的文化型）を中心としたある一定の限界内でおこなわれる。したがって、もろもろの現実的文化型に接触する子どもの側の受けとり方の点からみると、多少の偏差は捨象されて、それらの行動の累積が子どものパーソナリティに与える影響は、典型的文化型の反覆から生じる影響とほとんど異ならないと考えられる。リントンは、それはちょうど、物理学者のいう収斂現象 (convergent phenomena) のような作用であると言う¹⁷⁾。

これは、もちろん、一社会の現実的文化型に関して言っているのであって、子どもにとってきわめて重要な人物（例えば親）が、ある行動項目において継続的に典型的文化型からの偏差を示す場合、その影響が加味されることを否定するものではない。

③典型的文化型は、さらに、個人のパーソナリティを診断する際にも有効である。典型的文化型は、特定の状況において一社会の人々のとる行動の最頻値である。一方、ある個人が同じ状況においてとる行動の最頻値は、典型的文化型とは必ずしも一致しない。そのずれが現実的文化型の限界を逸脱した場合には、社会的否認や制裁が加えられるだろうが、限界内（許容範囲）にある場合には社会的に否認されることはなく、その個人の傾向性や習性を示すものとして認識されるだろう。

例えば、学校への登校時刻について、ある子どもが他の子どもたちより常におそい（典型的文化型からずれている）場合、それは、その子の学校に対するある種の態度を示していると考えられる。しかし、登校時刻のみならず、友だちとの約束時刻、会合の開始時刻などの時間状況に一貫してルーズである場合は、約束ごとや規則に対するその子の習性、つまりパーソナリティ特性を示すものだと判断される。

われわれは、日常生活の中で、以上のような論理的操作を意識的にすることなく、典型的文化型からのずれを直観的に判断して、他人のパーソナリティについて云々するのである。

以上のように考えてみると、文化とは行動や文物から抽象した理念的構成体であるという主張は、この典型的文化型、およびその組織体としての典型的文化を指していることがわかる。そして、それらの抽象の土台である現実の生活、行動、文物などを認めないところに問題がある。文化は、理念的構成体という側面と共に、実際に観察したり、触知したりしうる実体という側面も

備えているのである。

〔3〕理想型

文化のもう一つの相として、理想型 (ideal patterns) としての側面がある。その社会で重要とみなされている状況や事柄に関して、人々がもっている望ましい行動の仕方、考え方、あるべき姿などについての観念である¹⁸⁾。それらは道徳教育、標語、モットーなどを通して語られるものであって、例えば、「正直」「人に親切」「約束を守る」といったパターンである。

こういった理想型は、同じ観念形態であるその社会の典型的文化型とは必ずしも一致しない。むしろ、たいていは不一致であるという性質をもつ。したがって、その社会の人々の語る理想型は、現実的文化型の指標ではあり得ないのである。しかし、往々にしてわれわれは、理想型を現実的文化型の指標と考えてしまう誤りをおかしている。

ところで、重要な状況における人々の現実の行動（現実的文化型）もある種の価値観にもとづいておこなわれるものである。それが、その人々のもつ理想型と不一致であるということは、一定の状況に関して2つの価値基準があるということを意味する。言い換えれば、現実的文化型はホンネの価値にもとづいており、理想型はタテマエの価値にもとづいていると言えよう。タテマエとしての理想型も、実際の行動の規範であって、逸脱を防ぐ力になり得るものではある。しかしそれは、往々にして、現実から遊離して言語化のみがすすんでいく傾向をもっている。言語化がすすんで、童話や神話の次元に近づいた理想型はもはや規範としての力をもってはいない。「正直な子ども」「よい子の皆さん」などは、そういう種類の理想型であろう。

〔4〕文化と個性

はじめに、クラックホーンの文化についての定義を引用し、文化とは一定の社会の成員の間に共通に保有されている生活に関する様式であると言った。そして、個人の行動やパーソナリティに対する文化的要因の規定力の強さについて述べてきた。それならば、なぜ同一文化の中において個性差が生じるのであろうか。

この問題に答える上でも、文化における二側面、現実的文化型と典型的文化型を区別して考えることが役に立つ。つまり、指標としての典型的文化型に対して、現実的文化型は多様な行動のバリエーションを含む一定の範囲であることを強調しておいた。現実の行動は、例えば、昼食なら12時半というように固定したものではなくて、11時頃から午後1時半頃までという時間的な幅が認められる。目上の人に会った時の挨拶の仕方、ある程度の様式の変化が許容されている。壺をつくる場合なら、有効性を損なわないかぎりかなりのバリエーションが可能であろう。事柄によって、許容範囲が狭いこともあるが、かなりの自由が許されることもある。その限界内にあるかぎり、行動の偏差は個性として認められるであろう。そして、典型的文化型からのへだたりが大きい程、個性の強さとして認識されるだろう。しかし、限界を逸脱した行動型の偏差は、異常性と考えられ、社会的否認や制裁の対象となる。

また、仮りに2人の個人がまったく同じ文化的規制に従わねばならなかった場合でも、その影響が同じ結果となって現われることはあり得ない。なぜなら、個人の資質に相違があるために、同じ文化的制約といえどもその意味は異なってくるからである。例えば、2人の子どもに毎日同

藤本：文化とパーソナリティ

じ量と質の労働が課せられるような場合でも、体力や能力の差によって、難なくこなす子どもと耐えきれない程の苦痛を感じる子どもとでは、パーソナリティへの影響は非常に異なってくるであろう。

さらにまた、一社会の中の成員はすべて同じ諸文化型を経験しているのかというと、そうではない。共通に経験している文化型もかなりあるだろうが、性別、所属する家族、社会的地位、その他の境遇に応じて、異なった文化型を経験しているのである。経験の相違は、それぞれのパーソナリティに違った影響を与えるであろう。

以上のような理由で、類似の文化型を経験している一社会の成員にも多様な個性差が生じるのである。大きな個性の偏差は、文化変化の大きな原動力となるであろう。天才的才能は、現実的文化型の限界ぎりぎりのところで個性を発揮するだろうし、場合によってはその時代には異常性とみなされることもあるだろう。その変異の大きさが、その社会の文化に対して大きな衝撃を与えるのである。

Ⅲ 文化とパーソナリティ

新しく生まれてくる人間の子どもは、他の動物に比較して、本能的な能力や生得的にセットされている行動力はきわめて劣弱である。無力な状態にあるので、生存をつづけていくためには、他の人々の全面的な保護と援助に頼らねばならない。しかし、生まれながらにきわめて大きな知的可能性と可塑性をもっている人間の子どもは、環境や経験から急速に様々のものを学びとり、自らを形成し、変化させていくのである。

子どもが生まれてくるのは、社会一般といった所ではなく、現実機能している特定の社会である。つまり、人々は一定の様式にしたがって生活を営んでおり、生産のための知識や技術をストックし、価値観や信仰をもち、組織は地位による分化と同時に統合の機能を備えているであろう。そして、どの社会の大人たちも、自分たちの社会を存続させたり、より発展させたりしたいと望んでいるにちがいない。それ故、大人たちは、新しい世代をどう養育し、教育するかという一定の制度や考え方を用意しているのである。

したがって、特定の社会に生まれてきた子どもが先ずおこなうことは、自らの力で生き、自らの社会をつくるということではない。既存の社会成員に保護され、援助され、彼らに混じって、既成の生活様式に適合して生きることである。そして、子どもたちは成長するにつれて、その社会の衣食住に関する欲求の満たし方をはじめとして、あらゆる生活行動の様式を習得し、その社会の他の成員と類似の行動の仕方、感じ方、考え方をするようになっていく。

パーソナリティ形成をこのような過程と考えて、社会学ではこれを社会化 (socialization) と呼び、文化人類学では文化化 (enculturation) と呼んできた。江淵一公氏によると、社会化という言葉の使用は、フランスの社会学者デュルケーム (E. Durkheim) が1922年に著した『教育と社会学』の中で、教育を定義して「教育とは要するに、成熟した世代による未成熟な世代の組織的社会化である」と述べたことにはじまるという。それ以来、社会学者、心理学者、教育学者などの間で、個人が社会的環境に適応するように、その社会の価値、知識、技術などを習得することを意味する用語としてひろく用いられるようになった。一方、文化化という言葉は、文化人類学者の間で社会化とほとんど同義語として用いられてきた。しかし、最近この2つの用語を区

別する学者が目だつようになった。例えば、アメリカの人類学者ハースコヴィッツ (M. J. Herskovits) は、社会化は個人をその社会の地位・役割体系の中に統合させる役割取得の過程と考え、文化化は個人が所与の社会に固有の行動様式を習得する文化的条件づけの過程全般を指すものとしている¹⁹⁾。

要するに、これらの概念は、未成熟な子どもを文化的に条件づけ、社会に適応・同化させ、成熟した社会的存在に変えていく働きを指しており、パーソナリティ形成を社会や文化の側からとらえるものなのである。

これに対して、心理学の領域では、パーソナリティ形成という同じ現象を、個人の側から、発達という概念でとらえる。これは、子どもから大人への成長的变化を、内面的なものの分化と統合の過程に注目するのである。発達にかかわる環境的要因が考えられるけれども、単純化されることが多く、文化的要因に関する深い考察はみられない。

I 章において述べたように、文化は人間に対して大きな規定力(影響力)をもつことは確かである。しかし、文化は人間が存在することによってつくり出されるものであり、人間によって支えられているものでもあって、人間に対して超越的な力を及ぼす実体のように考えられてはなるまい。人間は、文化のなすがままに操作され、決定されるものではない。そのことは、同じ文化圏に所属している人々でも、各人の顔に相違があるように、それぞれ独自のパーソナリティ特徴を保持していることに示されている。また、様々な異なる文化圏に所属しておりながら、人間としてのある種の共通性を指摘することができるのは、人類共通の人間性や可能性の存在を感じさせられる。パーソナリティというのは、人間の成長エネルギーや可能性といった内的な力と環境的条件がぶつかり、相互に作用し合う中で形成され、変容されていく力動的な機構である。

したがって、パーソナリティ研究というのは、心理学、社会学、文化人類学、その他の諸科学の接点領域にあって、その解明のためには綿密な学際的協力が必要とされるであろう。そういう問題意識の上に立って、パーソナリティに関する私なりの理解のし方を提示し、パーソナリティ形成のプロセスと、そのプロセスにおける文化的要因のかかわりについての一つの考察を展開してみたいと思う。

〔1〕 推定されるものとしてのパーソナリティ

われわれは、ある刺激状況に直面した時、ある種の行動をとろうとする。朝起きると、まずある方法で顔を洗うであろう。食卓につくと、あるマナーで食事をはじめると、食物に対する一定の好みも示すであろう。外に出かける場合には、何をするかに応じてそれにふさわしい衣服をつける。季節によって材質や色彩の選択を変えるであろう。路上で知人に会えばある方法で挨拶をするし、困っている人をみると手助けしてあげなければと考えたりもする。

そういう様々な反応行動を考えてみると、個人の内部には、そういった反応行動をおこさせるある種の心理状態の存在することを認めることができる。また、くり返し現われる類似の刺激状況に対して、比較的一貫した反応行動をとる傾向性をみると、それらの心理状態が時間的にも継続していることを想定することができる。このような、ある個人に、ある仕方では反応行動をおこさせようとする心理状態(先には、行動の仕方、感じ方、考え方とも言った)の総体をパーソナリティと呼ぶのであるが、ここで、もう少しパーソナリティ概念に立ち入って検討しておこう。

パーソナリティという概念も、先に述べた文化と同様、まだ正確な意味内容は確定しておらず、多数の定義が存在する。パーソナリティ心理学の領域において下されている定義の代表的なものを引用すると、オールポート (G. W. Allport) は「パーソナリティとは、個人の内部で、環境への彼特有な適応を決定するような、精神物理学体系的の力動的機構である」としている²⁰⁾。精神物理学体系的 (psychophysical systems) というのは、習慣、態度、感情、傾向などを指すのであって、パーソナリティがまったく精神的なものでもなければ、まったく神経的なものでもないことを意味する。また、パーソナリティは、常に進化し、変化している自己調整的なものとみなされるので、力動的機構だとしているのである。

リントンは、もう少し簡単に「パーソナリティとは、個人に固有の心理過程及び心理状態の組織的な集合体である」²¹⁾ と定義しているが、彼が敷衍している考え方をみると、「心理過程及び心理状態」の中には、能力や気質のような生理的因子、態度のような一般的な反応型から行動習慣のような特定の反応型などまで含まれている。また、パーソナリティは、絶えず変化の状態にある継続体であると考えられているので、「組織的な集合体」はオールポートのいう力動的な機構であるという意味がこめられているであろう。

その他これまで出されてきた定義や考え方をふまえて、私はパーソナリティを次のように定義しておきたい。パーソナリティとは、個人の内部にあって、刺激状況に対するその個人の反応行動を規定するような反応型の力動的な組織体である。

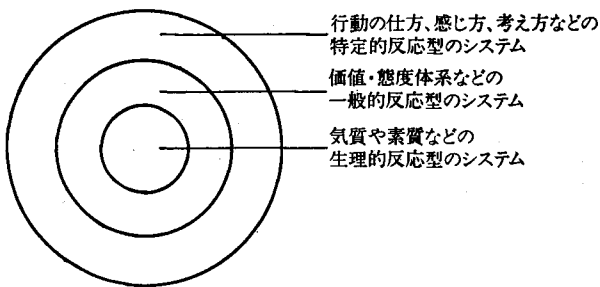
パーソナリティに包括される様々な反応型を、性質の違いによって大きく次の三つのシステムに分けて考えたい。

第一のレベルは、特定の反応型で、特定の状況における行動の仕方、感じ方、考え方など一連の習慣的反応の仕方である。例えば、朝起きた時にまず何をしようとするか、顔を洗う習慣の人もあるし、洗わない習慣の人もあるだろう。朝食の前に太陽や神仏を拝む人、一仕事する人、そんなことを抜きにしてすぐ食事をとる人、いろいろな行動の仕方があるだろう。特定の言葉（忌み言葉など）に対する感じ方、降り出した雨に対する考え方もそれぞれ違っているであろう。そういった特定の状況に対する反応行動への心的準備性と言ってもよい。これらの反応型は相互に関連し合って、システムをなしていると考えられる。

第二のレベルは、一連の一般的反応型であって、例えば、人に対するやさしさ、あるいは尊大さ、物に対する儉約精神、あるいは浪費癖、超越的なものに対する信、あるいは不信といったものである。これらの反応型は、個人の様々な生活行動の中にはいついていついて、行動の動機となる性質のもので、特定の反応型に対して一般的な反応型と名づけられる。つまり、価値観や態度に相当するものであって、リントンは「価値 (value) という言葉を、一連の状況に共通して存在し、個人の内面的反応をよび起こしうるすべての要素と定義し、態度 (attitude) という言葉は、そのような要素によってよび起こされる内面的反応と定義したい」と言っている。このような価値と態度は相よってシステムを形成するものであり、それを価値・態度体系 (value=attitude system) と称するのである²²⁾。

第三のレベルは、生得的な気質や素質からなる一連の生理的反応型である。気質というのは、例えばヒポクラテスの4分類というのがある。すなわち、胆汁質、多血質、憂うつ質、粘液質の4つであって、胆汁質は怒りやすい、多血質は楽天的、憂うつ質は抑圧的、粘液質はのろまとい

図1 パーソナリティ構造（反応型の構造）



うように一面だけが強調されている。

しかし反応型として考える場合、胆汁質と多血質は興奮が速いが変りやすく、前者は興味が強いに対して後者は弱い。憂うつ質と粘液質は、興奮がおそいが永続的で、前者は興味が強いに対して後者は弱いというふうに中立的に解したい²³⁾。

素質としての知的能力、芸術的能力、運動能力が人生に対してどの程度の影

響力をもっているかを無前提に言うことはできないし、努力や学習によって変化するものでもあるが、経験的に言って、それらの素質が人間の反応行動に影響を与えていることは否定できないであろう。そういうわけで、パーソナリティの構成要素として、生理的反応型のシステムを考えるのである。

以上に述べてきた反応型の3つのレベルを図式的に考えると、パーソナリティ（反応型の組織体）は図1のような構造をもったものとして示すことができるであろう。このように、パーソナリティを3層構造において考えるのは、理解と説明の便宜のためであって、このような構造的な実体があるわけではない。これまで、一般的に3つのレベルに分けて説明されることがよくあったし、先に述べたように、反応型に生理的・心理的性質の相違があることを認めるならば、これは妥当な考え方であろう。

これまで、反応行動と反応型という用語を注意して区別してきた。パーソナリティ要素としての反応型は、反応の仕方の標準（standard）であり、反応行動への心的用意性である。反応行動というのは、反応型がそのまま表現されるのではなく、環境の条件との相互関連の結果である。例えば、他人に対してやさしい心もち、困っている人に出会ったら手助けをしてあげたいという反応型をもっている人でも、バスに乗りおくれそうな時にはそういう行動を起こさないこともある。したがって、反応型というのは1つの反応行動だけから判断されるものではなく、数多くの反応行動から推定されるものである。

パーソナリティに内面化された反応型は、比較的安定して継続するものではあるが、固定化された永続体ではない。たえず連続的に変化していくものである。特にパーソナリティの表層部にあつて、特定の状況としか結合していない特定の反応型は、環境が変化して既成のものが不適当になればそれは捨てられ、新しいものが組み入れられていく。一般的な反応型は、パーソナリティの深層にあつて、数多くの特定の反応型と関連しているだけに変化し難いものである。しかし、それも長い年月の間には変化をしていくであろう。そういう意味で、パーソナリティは力動的な組織体だと言えるのだが、他方、それはパーソナリティの柔軟性を示すものである。人間が環境に適応して生きていくためには、パーソナリティの比較的安定した継続性と同時に、この柔軟性も必要なのである。

先に、個人が内面に保持する反応型は、その個人の様々な行動から推定されるものであると言った。したがって、様々な反応型の組織体であるパーソナリティもまた推定されるものであつて、

直接観察の対象となり得ないものである。パーソナリティという言葉を多用していると、そういう客観的な実体が存在するかのようだが、そういうものではない。われわれは、ある人が他人に対して親切であるか不親切であるか、約束ごとに対して忠実であるかルーズであるかといったパーソナリティ特性を、その人の数多くの行動における一貫性や規則性にもとづいて推測し、構成しているのである。

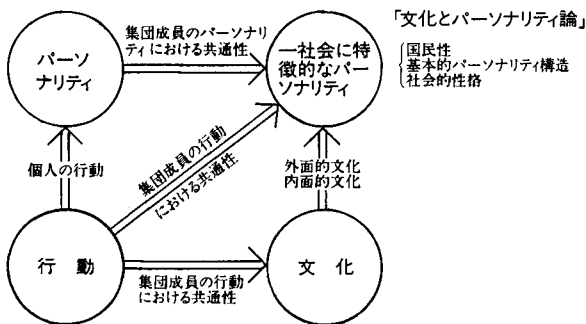
心理学の領域では、パーソナリティを投影的 (projective) に検査する方法として、ロールシャッハ・テスト、TAT (Thematic Apperception Test)、PFT (Picture Frustration Test) などが考案されてきたし、態度を抽出するものとして態度尺度 (attitude scale) も用いられているが、いずれもまだまだ不完全だし、パーソナリティの限られた部分を取りだしているにすぎない。こういった心理的テストやスケールも、パーソナリティを推定するための一つの材料であると考えたい。

ところで、文化について論じた際、文化には客観的に観察することのできる行動様式、物質的生産物、人間の中に内在する知識、信念、信仰、価値観など3種の現象が含まれていると言った。この内面的な文化もまた、人間の行動や文物を通して推定されるものである。それでは、パーソナリティと文化では、推定のし方にどういう違いがあるのだろうか。パーソナリティというのは定義に示されているように、個人の内部にある個人特有の反応型のシステムである。したがって、それは個人の行動を基礎として推定されるものである。それに対して、内面的文化は、その社会の成員に共通に保有されているものであるから、集団成員に共通な行動を基礎として、知識、技術、価値観、信仰、嗜好などの文化項目にそって推定されるだろう。

ここで、行動、文化、パーソナリティなどの諸概念と深い関連のある「文化とパーソナリティ論」(カッコ付きで表記される) についてふれておかねばなるまい。これは、先述したミードやベネディクトの研究が刺激となって、様々な文化の内部における育児様式とパーソナリティとの相関関係に注目が払われるようになり、1930年代のアメリカにおいて盛んになった研究である。関心が高まるにつれて、育児様式といった狭い文化的要因だけでなく、農業生産の方法、衣食住や性に関する制度、民話や神話などをふくめた宗教的イデオロギー、社会環境や経済的要因なども枠組の中に入れられ、精神分析学などとも強い関連をもって、一社会に特徴的なパーソナリティ型を析出するという諸研究がおこなわれた。その代表的なものは、ミードやベネディクトらによる国民性 (National Character)、カーディナーの基本的パーソナリティ構造 (Basic Personality Structure)、リントンの基本的パーソナリティ型 (Basic Personality Type)、フロムの社会的性格 (Social Character)、インケルスのモダル・パーソナリティ (Modal Personality) などがある²⁴⁾。ベネディクトらが、太平洋戦争中におこなった日本人研究の結果をまとめた『菊と刀』(The Chrysanthemum and the Sword) もその一つである。

ところで「文化とパーソナリティ論」において問題にされてきた一社会の成員に共通な性格は反応型であろうと人間類型であろうと、それらはやはり推定されるものである。推定の基礎は、一社会の文化、集団成員各目のパーソナリティにおける共通性、集団成員の行動における共通性にもとめられるであろう。前二者は、これまで述べてきたように、行動から推定されるものであって、客観性の確立し難い対象である。したがって、「文化とパーソナリティ論」には科学的研究の困難さが伴ってきたし、精神分析理論の形式的な適用という問題性もあった。そういうわけ

図2 4現象の関連図式
(矢印は推定の方角)



で、この領域の研究はしばらく下火になっていたが、最近、心理人類学という新しい名称のもとに再び注目を集めるようになってきている。

以上述べてきたように、客観的に観察される行動を論理的基礎として、文化、パーソナリティ、一社会に特徴的なパーソナリティ型が推定されるわけだが、そのことを図式的に示したのが図2である。

〔2〕 特定の反応型習得のプロセス

ある刺激状況に対したとき、われわれの内面には、ある種の行動をとりたいという心的反応がおこる。それは意識されることが多いだろうが、顔を洗う、歯をみがくというような日常の習慣的行動の場合は意識にのぼってこないこともある。そういう反応がおこるのは、内面に反応型が存在するからであって、そういう様々の反応型の組織体がパーソナリティであると考えた。パーソナリティの大部分を構成する特定の反応型のシステムや一般的反応型のシステムは生得的なものではなく、誕生後の経験を通して身につけるものである。つまり、パーソナリティ形成は学習に依存しているのである。しかも、広範で複雑なそれらの反応型のシステムを身につけるには、高度の学習能力が必要とされるであろう。

特定の反応型は、特定の刺激状況に直結しているものであるから、その場その場の具体的な経験を通して直接習得される。それに対し、一般的反応型というのは、例えば人に対する親切な態度といったものであるが、それをそっくり、直接的に習得することは不可能である。様々な具体的経験を統合して習得されるべきものであろう。一般的な反応型は後まわしにして、まず特定の反応型がどのようなプロセスで習得されるのかを考察してみよう。

(1) 教育作用による習得

新しく生まれてきた子どもたちの反応型の習得源としてまず重要なのは、親をはじめとする社会化の agent が、子どもに向けておこなう行動（養育、しつけ、技能や知識の伝達など広い意味の教育）である。

子どもは生まれるや否や、いやおうなく、住居の中に置かれ、衣類や寝具にくるまれ、授乳され、子守りされ、言葉がかけられる。寝起き、食事、排泄をはじめとした日常の生活行動についての訓練（しつけ）は早々に開始されるし、いろいろな玩具や遊び道具が与えられる。年中行事、祭り、その他の宗教的な生活にもふれる。成長するにつれて、家事労働や生産労働の一端が課せられるし、知識や技能についての意図的な教育もおこなわれる。

子どもに向けておこなわれる周囲の人々のそれらの諸行動、子どもに与えられる物や道具、教えられる知識や技能は、その社会の文化型にのっとっている。子どもたちの反応行動もまた、それぞれの文化型に適合することが要求され、適合するかしないかに応じて、社会的承認または否認、賞または罰が与えられる。くり返し現われる類似の状況において、一貫した社会的裁可が与

えられると、子どもたちは、是認され賞讃される反応様式を習得し、内面化していくが、否認され罰が与えられるものは捨てて、習得することはない。

(2) 模倣による習得

他人の行動様式を観察して、それを模倣してやってみることによって反応様式を習得するという方法がある。これは、モデルとなる他人の行動を記憶し、同様の行動を遂行できる能力が条件となるので、一定の発達段階に達してからの習得方法である。一定の発達段階といっても、行動様式の難易による相違があることはもちろんである。

模倣による習得過程を効果的にすすめる条件としては、次の2つがあるだろう。1つは、自分がしたいと思っている行動をしている他人のそれを模倣する場合である。例えば、子どもが扉のカギを開けて外に出たいと思っている時には、他人のその行動の仕方はよく模倣されるだろう。この場合、行動の仕方に関心があるので、他人が誰であるかはあまり問題にならない。もう1つは、子どもが愛着や尊敬をもっている他人の行動はよく模倣されるということである。そういう人々は、両親、好きな先生、遊び仲間のリーダー、仲のよい友人などであって、子どもたちはそういう対象に同一化したいという欲求をもっている。そして、行動を模倣するというのが、子どもたちの同一化の欲求を満足させるのである。

模倣の対象となる行動や同一化したいと思う他人の行動が、文化型から逸脱しているという場合もあるかもしれないが、普通は文化型内にあることがはるかに多いであろう。

普通考えられている以上に、模倣が反応型習得の大きな源泉となってきたのは、子どもたちがしたいと思う行動について模倣の対象が非常に多く、また行動を成功させるのに大へん有効だということである。また、幼児期以来、家族の者の行動を模倣することが常に賞讃と好意に結びついてきたという経験を有しているからである。民俗学の知見によると、日本語の「まねぶ」は「まねぶ」に由来するといわれる程なのである。

(3) 試行錯誤による習得

ある状況において反応行動をしなくなればなくなり、しかも模倣するモデルも知識のストックもないような場合、子どもは試行錯誤の行動をすることがあるだろう。大人でも、カギが開かなくなったようなごく限られた状況で、瞬時的に試行錯誤をすることがありうる。心理学のある領域では、試行錯誤の学習過程を大きくとりあげる傾向があるけれども、人間の場合、子どもでも試行錯誤によって反応型を習得するということはあまりない。先に述べたように、模倣のモデルが存在することが多いし、試行錯誤はあまり効果的でないということを知っているからである。

(4) 知識と思考作用による習得

模倣することのできる型や対象がないという稀な場合でも、人間は、試行錯誤に頼るよりも、状況を観察し、分析し、結果を予測して行動の仕方を案出しようとする。その際、過去の類似の状況や、直接的間接的经验にもとづく知識、教育の結果習得している知識などが引き出され、応用される。その方が、試行錯誤に頼るよりはるかに少ない時間とエネルギーの消費ですむことを知っているからである。子どもでも、かなり早くからこの方法をとるようになる。

過去の経験にもとづいて保有している知識というのは、その社会で成功したり、有効性が保障されたりしているものであって、当然ながら文化型に適合したものである。それを応用するということは、ひろい意味での模倣であり、文化型からはずれることはないであろう。

知識は、新しい反応型の発展にかかわる機能にもとづいて2種類に分けることができる。第一は、ある状況における一連の行動様式をよく知っているという場合であり、第二は、相互に関連のない事実の諸項目を貯えているという場合である²⁵⁾。

第一の種類の知識は、山に行って火をたく必要が生じたような場合、枯れ葉、細い枯れ枝、太い枯れ枝を集めてきて、それらを燃えやすいように、風通しのよいように組み合わせ、マッチをすって燃えやすい枯れ葉の部分に火をつけるという一連の行動を考えてみればよい。たとえやってみた経験がなかったとしても、そういう場をしばしば観察しておれば、一連の行動を想い出してやってみることができる。第二の種類の知識は、枯れた木は生木よりよく燃える、空気中には酸素が約五分の一含まれている、酸素は火をよく燃やす性質がある、といった事実を相互に関連なく覚えているという場合である。断片化された知識は、ペーパーテストの解答に役立つことはあっても、行動には結びつけることはできない。断片的知識は、ある目的にそって組み合わせられ、相互に関連づけられることによって、はじめて有効性をもってくるのである。

(5) 反応型の修正と適応

以上、ある個人が特定の状況における反応型を習得する過程を、教育、模倣、試行錯誤、知識と思考作用の四つに分けて説明したが、普通の場合、それらの中の一つの過程のみが働くのではなくて、諸過程が共に働き合うであろう。例えば、目上の人に会った時の挨拶の仕方というような簡単なものだと、ほとんど教育と模倣の二つの過程の働きによるであろう。山で火を燃やすというような複雑な行動の場合だと、教えられただけでは要領を得ず、同時に上手な人の模倣をするであろうし、木の組み合わせ方などではどんな状態がいいかと試行錯誤する過程も働くにちがいない。また、学校で習って覚えていた燃焼の理論を考え合わせて納得するというように、四つの過程がからまり合って学習がすすめられるであろう。

いったん成功した行動様式は記憶されるが、最初のうちはかなり意識して保持されなければならないだろう。類似の状況における成功的な反応行動がくり返されるうちに、目的の達成を容易にするように、行動方法が合理化されると同時に、一方では、反応行動をおこなう個人の資質や技能、あるいはすでに内面化されている他の反応型にも適応したものに修正されていく。こうして、行動への心的用意性として個人の内面にセットされたのが特定の反応型である。この反応型は、特定の状況が出現するたびに、反応行動への動機として作用するであろう。

[3] 一般的反応型の形成

先に、一般的反応型というのは、特定の反応型よりもうひとつ深い層において人間の行動を規定しているものであって、価値・態度体系と呼ばれるようなシステムを形成していると考えた。特定の反応型が、特定の状況と結びついた反応行動の動機となるものであるのに対し、一般的反応型は、様々の状況における反応行動の中にはいっていき、それらの共通の動機となるものである。したがって、特定の反応型は、特定の状況における経験によって習得されるのに対して、一般的反応型は、様々な状況における経験を統合して形成されるものである。

例えば、ある子どもが「人に対するやさしさ」という一般的反応型を確立した場合、彼のやさしさ行動は、家族の者や仲のいい友だちに止まらず、同級生、近所の人々、いろいろな場で出会う見知らぬ人々へと広がる一般性をもっているであろう。ところが、やさしさ行動が親・きょう

だいなどの身内の範囲に止まってそれ以上広がらないとき、それは一般的反応型としてのやさしさではなく、利己主義的態度というべきであろう。また、交際の親疎にもとづいて、人々をウチとソトに区別し、親しい人々にだけやさしさを示すのは、ウチ意識にもとづいた閉鎖的態度とい

ってよからう。
一般的反応型というのは、道德教育におけるように言葉としては表現できるが、そっくりそのまま、直接的に習得するということはできない性質のものである。

いま、「礼儀正しさ」、「清潔好き」という一般的反応型を例にとって、それらの形成における特定の反応型との関連を考えてみると、次に示すようになるであろう。

特定の反応型	心的プロセス	一般的反応型
○家庭の様々な状況における挨拶、言葉づかい、立居振舞 ○訪問先での挨拶、言葉づかい、立居振舞 ○近所の人々との接触の場における挨拶、言葉づかい、立居振舞 ○他人から恩恵を受けた時や他人に迷惑をかけた時の挨拶、言葉づかい、立居振舞 ○その他	統合と投射	→ 礼儀正しさ
○朝晩歯をみがく ○顔を洗う ○よく入浴する ○帰宅した時、手を洗い、うがいをする ○常に清潔な衣服を着る ○よく掃除をする ○その他	統合と投射	→ 清潔好き

すなわち、様々な状況における経験によって習得された特定の諸反応型が、力動的に統合され、投射 (project)²⁶⁾ されるというプロセスを通して、ひとつの一般的反応型が形成されると考えるのである。一般的反応型が、いったんパーソナリティ要素として定着すると、それは、今度は逆に特定の反応型に投射的に作用して、それらを強化したり、新しく習得されるのを容易にしたりする。このことは、われわれが、内面化している一般的反応型に適合した行動をとると気持ちよく感じ、それに反する行動をとると情緒の混乱を感じることに、自分の行動ではなく、他人の行動を見た場合でもわれわれ自身の心の中に同様な情緒的反応がおきることを考えてみれば納得できるであろう。

ところで、個人の生涯の初期が、パーソナリティの深層部分（一般的反応型）を形成するのに重要な時期であることが、今や一般的に認められている。このことが認識されたのは、一つには、文明社会の内部の特異な個人を研究し、その結果、それらの特異性のあるものが常にある特異な幼児期の経験に結びついていることが発見されたことである。次に、無文字社会の研究がすすめられるにつれて、その社会で正常とされている成人のパーソナリティも育児の文化型も、われわれの社会のものとは異なっていることが明らかにされ、ひるがえって、われわれの社会で正常と考

なったことである²⁷⁾。

幼児期が一般的反応型の形成にとってなぜ重要であるかという理由の一つは、幼児はそれをもって生まれてこないということである。パーソナリティ構造において基本的に重要なそのレベルは可能性にのみ占められていて、いわゆるタブラ・ラサの状態にある。したがって、生まれるや否や開始される様々の状況における諸経験は、一般的反応型として統合され、形成されやすいのである。理由の第二は、一般的反応型がいったん形成されると、それは数多くの特定の反応型と結合し、その中にはっていく。したがって、1つや2つの外面的な行動型の変更が深層の反応型を変化させることはあまりないからである。かりに、環境に大きな変化があつて、特定の反応型の多くが変化された場合でも、内面における情緒的軌跡が大きく、システムの再調整にはかなりの時間を要するであろう。

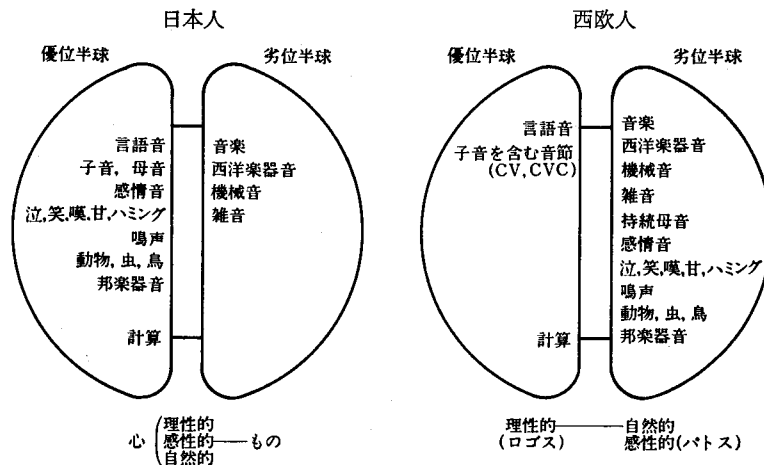
人間の幼児期経験を左右する育児様式は、その社会の文化全体と深い関係があり、親を中心とする初期のパーソナリティ形成の agent の行動は、一般的に文化型にそつておこなわれている。そして、前節で考察したように、子どもたちの習得する特定の反応型は、その社会の文化型にそつたものである。それらを基礎として、統合的・投射的に形成される一般的反応型は、やはりその社会の文化をその個人なりに内面化したものである。

【4】 音の認知機構と文化

文化は、生得的な生理的欲求や、右手利きのような体の機能にも影響を与え、変容させる力をもっていることをI章で述べた。それだけでなく、文化は人間の精神活動の基礎である脳の機能にまで入りこみ、影響を与えるものであることが明らかにされてきている。

人間の脳半球は解剖学的には左右対称にみえるが、機能的には著しい差がある。左半球（左脳）は、言語、計算、論理的思考、分析、計画などの知的機能を分担しており、優位半球あるいは言語脳と呼ばれる。右半球（右脳）は、物事の全体的知覚、空間的把握、音楽や機械音の受容など非言語的、感性的機能にすぐれており、劣位半球あるいは音楽脳と呼ばれる。こういった脳

図3 日本人と西欧人の音の認知様式の差



の原則的な受容機構については、洋の東西をとわず差がない。

角田忠信氏は、ある秋の夜に経験した虫の鳴声の聞こえ方の違いにヒントを得て、様々な音が左右どちらの脳で処理されるのかをテストしたところ、日本人と西欧人では特徴的な相違のあることが判明した。それを図示したのが図3である²⁸⁾。これをみると、日本人は、虫の鳴声だけでなく、その他の動物の鳴声、人間の感情音（言語音以外の泣声、笑声、嘆声、ハミングなど）、母音、邦楽器音などを左半球の言語脳で処理しているのに対し、西欧人では、逆に右半球の音楽脳で処理していることがわかる。つまり、日本人は虫の音などを言葉のように聞いているのに対し、西欧人は同じ虫の音を単なる環境音（雑音）として聞いているということである。

角田氏のさらに興味ある発見は、外国生まれの日系二・三世は、西欧人とまったく同じ処理様式を示すにかかわらず、日本で生まれ、幼時を日本ですごした二・三世は日本人と同じパターンを示すという事実である。そして、日本人と非常によく似ているのではないかとされている朝鮮の人は完全に西欧型であるというから、今のところ日本型は日本人特有のものらしいことである。

それでは、なぜ日本人は虫の音や鳥の声を言語脳において聞くのかと言えば、そういう認知機構をつくりだすような性質が日本文化の中に存在するからであると考えられる。まず第一は、擬声語の発達している日本語文化の中に育ったわれわれは、虫の音や鳥の声を言語化して聞いているし、「聞きなし」などは鳥の声を意味のある文章にして聞いているということである。例をあげてみよう。

虫	鳴	声	鳥	鳴	声					
コ	オ	ロ	ギ	……	コロ	コロ	コロ	コロ	……	
マ	ツ	ム	シ	……	チン	チロ	チン	チロ	チンチロリン	
ウ	マ	オ	イ	……	スイ	ッ	ッ	ッ	ョ	
キ	リ	ギ	リス	……	チョン	・	ギ	ース		
ク	ツ	ワ	ム	シ	……	ガ	チャ	ガ	チャ	ガチャ…
					</					

第二は、われわれの使用する日本語は、虫の場合、鳴き声を固有名詞化していることである。例えば、ニイニイゼミ、ミンミンゼミ、ツクツクボウシ、チョンギス（キリギリス）、スイッショ（ウマオイ）、ガチャガチャ（クツワムシ）などである。幼児語では、他の動物の場合でも、モウモウ（牛）、ワンワン（犬）、ピョピョ（ひよこ）というように鳴声の名詞化がみられる。この場合、われわれ日本人は、鳴声（音）を聞きながら、一方では固有名詞、つまり言葉として聞くということをやっているのではなからうか。

第三は、日本人にひろく親しまれている俳句文化の中で、「虫」は秋を象徴する季題となっていることである。この場合、「虫」は、月、ススキ、秋風といった風物と結合し、秋の季節や自

例えば、学校には、大人に比べて圧倒的多数の子どもたちが存在しているが、子どもたちは生徒集団、学級集団として位置づけられており、先生の立場からは学校経営、学級経営、学級づくり、班づくり、ソシオグラムといった考え方で対処されるのである。

学校だけでなく、子どもたちの所属する社会システムの中には、大人集団よりはるかに大きな子ども集団が存在する。それらの集団は制度によってつくられたものであり、大人文化の枠内にあるとはいえ、それぞれに子どもの世界を構成しているのではないか。その代表は地域における遊び集団であって、他の集団に比べて大人文化からの自由が比較的確保されている。子ども集団には、子ども独自の行動の仕方、感じ方、考え方の様式が保有され、伝承されていて、私はそれを子ども自身の文化 (children's culture) と称しているのである。そして、子ども自身の文化とは、「子どもたちによって習得されたり、創りだされたりした子どもたち固有の生活様式であって、子どもたちの間に共通にもたれ、伝承されているもの」と定義したのである³¹⁾。

子どもの主体的な生活は、大人の制度的枠組の強制から解放される遊びの場にあるので、子ども自身の文化が成立するのは遊びの場が中心である。子ども自身の文化は、簡単に言ってしまうと、子どもの世界に伝承されている遊び方なのだが、表現形式によって分類すると、大きくは次の三領域があげられるだろう。①言葉によって表現される文化…わらべ唄、唱え言葉、絵や文字の遊び。②身体によって表現される文化…手わざの遊び、運動遊び、演技の遊び。③環境に働きかける文化…道具 (玩具) を使う遊び、手づくりの遊び、生き物とかかわる遊び。私が、子ども自身の文化と言うとき、このような行動型 (遊び方) だけでなく、その背後にある知識、感じ方、価値意識なども含めた全体を指している。

子ども自身の文化が、子どもたちの身体機能の発達、社会性や自立性の発達、知性や感性の発達に重要な意味をもっていることは己に指摘したことである³²⁾。子ども自身の文化は、パーソナリティ形成の重要な要因の一つであることが認識されなければならないのだが、これまでの社会文化の理論的枠組に含められてこなかったのは、それが大人文化の立場だけからのものだったところに原因があるといわねばならない。

生得的にセットされた生活力という点では非常に劣弱な人間の子どもは、最初は全面的な保護が必要だし、配慮のゆきとどいた養育や計画的な教育が必要であることはいうまでもない。したがって、家庭、幼児教育機関、学校、社会教育や社会福祉の機関におけるこどもの形成と教育の機能が重要になるのであるが、そういうところで大人が問題にしてきたのは、大人の立場からする子ども形成の文化 (大人文化) についてである。しかし、様々な社会システムの中で子どもたちがつくり出し、伝承してきた子ども自身の文化も重要な機能をもっているわけで、それを無視または軽視することはできないというのが私の考え方である。子どもは、大人文化と子ども自身の文化と両方に足を踏み入れて成長、発達していくのである。子どもたちの文化的主体性、自立性、創造性というものが重要だとされるのであれば、子どもの世界の主体性、自立性、創造性と、それを確保する子ども自身の文化が重要視されなければならないであろう。

文明の高度化は、大人文化を拡大・強化する方向をとっている。子どもの世界に対する大人文化の浸透、抑圧を強めている。子どもの世界が狭小化されている今日、意識的に子ども自身の文化の重要性に注目し、子どもの存在する様々な社会システムの中におけるその意味の問い直しをはからねばならないだろう。

IV 文化の両義性

ネラー (G. E. Kneller) は、文化は人間を解放するものであると同時に拘束するものであり、また、人間の潜在可能性の一部を発展させることによって他を抑制するものであるという両義的性格を指摘している。

われわれは、文化をもつことによって、あらゆる場面において、何を為すべきかをいちいち決定する大へんな苦痛からまぬかれるだけでなく、様々な要求や問題に対する既成の解決法を得、自らを解放し、エネルギーをより創造的な目的に向かって放出することが可能になる。また、事物に対する共通の意味付与をすることができることによって、お互いにコミュニケーションをし、共通の行動をとったり、協力したりすることができる³³⁾。

しかし、社会的秩序を考えてみればわかるように、それは、われわれが共通の行動をとり、共同生活をするために必要な文化であるが、一方では、外面的にも（法律や裁可を通して）、また内面的にも（習慣や良心を通して）われわれの行動の自由を制限するものでもある。言語はもっとよい例であろう。われわれは、言語によって自己表現をし、学習をし、感性をみがき、創造性を高めることができるのであるが、ある種の言語文化を選ぶことは、他の音ではなくある音を発するように強制されることであるし、ある種の文字、構文、文法規則を守るよう要請されることである。

ところで、ある特定の社会に生まれてきた個人は、まずその社会の有する諸文化型にいや応なく入れてまれ、適応して生きることが要請される。個人は、その社会の文化に従うことなくしては、生理的欲求さえも満たすことができないわけだから、要請される文化に適応することを学ぶのである。一方、文化に適応することは、それなりの仕方で欲求を実現し、能力を発達させ、自己実現を可能にする。また、文化に適応することは、社会の好意的反応と承認を得ることになる。したがって、文化に適応することによってもたらされる人間的な解放と自己実現の度合いが大きく、社会的承認度が大きい程、文化に対する拘束感は少なくなるであろう。つまり、文化に必然的に伴っている拘束性や限定性は、人間の解放と自己実現の大きさに応じて正当化され、支持されるのである。

両義的な性格をもった文化に適応して生きるということが、ひるがえって、人間自体の両義的性格を育てることになると思われる。すなわち、個人はパーソナリティの中に文化に対する適応性を育てると同時に、個性、創造性、自立性といった内的力を発達させることになる。前者は社会や文化を安定させ、永続させる役割を果たすが、後者は社会や文化を発展させたり、変化させたりする力になるであろう。したがって、人間は相当不都合な条件（文化）にも適応することができるが、ある限度を越えると、欲求不満をつのらせ、内的力を発動して、文化を変化させる方向に動くのである。

ある種の文化は、人間を解放し、可能性を発展させる側面よりも、制約的側面の方があまりに大きすぎる。規律や手段それ自体を目的化する文化があったり、中味の薄い形式主義や儀礼主義の文化があったり、強圧的な制度によって階級差を永続化したりということがある。文化人類学の知見によれば、アメリカ北西海岸のインディアンの中には、自分の財産を浪費し合い、ぶちこわし合う競争によって権威 (prestige) を獲得するような文化がある。また、自分の子どもを試合に勝たせるため、多大のエネルギーを投入してお膳立てし、地位を獲得させてやるという文化

もある。

現在の日本の教育文化、特に学校文化をふり返ってみる時、文化のマイナス側面が大きく浮かび上がってきていると思われる。学校は本来、子ども1人1人の可能性を開発し、個性を伸ばし、自己実現をはかることが目指されているはずである。しかし、現在の教育制度のもとではそうはなっておらず、形式的な知識主義、能率主義、テスト成績主義がひろがっている。そして、人間としての可能性や心の深みに対するアプローチが欠落している。そういう状況は、当然のことながら、子どもたちを欲求不満におとし入れるわけで、欲求不満のひろがりや深さが、様々の形の不適応、反抗、暴力、逃避などの土壌になっていると言えよう。表面には反抗の姿勢を示さない適応型の子どもたちの心の中にも強い欲求不満がひそんでいる。次に引用するのは、朝日新聞(56.11.13)の投書欄に掲載されたある学生の文章である。

…中学・高校と、私は自他ともに認める模範生だった。教師の言う事にはハイと従い、遅刻など言語道断、決められた道を決められた通りに歩く教師のお気に入りだった。しかし、他人からよく思われたいがただけに生きているような自分に疑問を感じ、悩まない日はなかった。

そんな私に、一人の教師は言ったのである。「いま一生懸命やらないといい思い出もできないよ」。先生、私は思い出を作るために生きているではありません。何のためにこんなつらい勉強をしないといけないのですか。私は人生の目的が知りたい。すべてをかけて燃えきれぬものが欲しいのです。私はこう言いたかった。でも言えなかった。どうせわかってくれないだろうし、何より軽べつされるのが怖かったから。

いま私は大学三年生。教師をめざしている。荒れに荒れている子どもたちは、何を考えているのだろう。きっとあの時の私と同じだ。彼らは自信が、命かけて燃やせるものが欲しいのだ。非行少年も模範生もみな同じだろう。私は人生に目的を持ち、それを生徒に語れる、そんな教師になりたい。

このように考えてくると、われわれは、文化というものをすぐれたもの、価値あるものと定義するのではなく、生活の様式としてとらえ、しかも両義性をもったものとして考えることが重要であると思う。そして、教育という言葉を知ると、とかく理想化し、無条件によきものとして考える傾向があるが、教育も文化の一様式であり、子どもに対しては大人文化であることを忘れてはなるまい。教育文化の将来は、どれだけ子どもたちの人間性を解放し、生を充実していけるか、そしてまた、子ども自身の文化をどう価値評価していけるかにかかっていると言えるであろう。

註

- 1) A. L. Kroeber and C. Kluckhohn, Culture—a critical review of concepts and definitions, A Division of Random House, 1963, p. 119.
- 2) Ibid., p. 83.
- 3) Ibid., p. 83.
- 4) R. Linton, The Cultural Background of Personality, Appleton-Century-Crofts, 1945, p. 32. 清水・犬養共訳『文化人類学入門』東京創元社, 昭和27年, 49頁。
- 5) R. Linton, Ibid., p. 38: 前掲訳書, 56頁。
- 6) Ibid., p. 38: 前掲訳書, 56頁。
- 7) G. E. Kneller, Educational Anthropology—an introduction, John Wiley & Sons, 1965, p. 4～5.
- 8) F. K. ボック, 江淵訳『現代文化人類学入門(一)』講談社, 昭和52年, 48～49頁。
- 9) 姫岡勤『文化人類学』ミネルヴァ書房, 1967年, 50頁。
- 10) F. エンゲルス『猿が人間になるについての労働の役割』大月書店(国民文庫), 1965年, 9～11頁。
- 11) 祖父江孝男『行動する人間』日本評論新社, 昭和34年, 67～70頁。
- 12) M. ミード, 畑中・山本共訳『サモアの思春期』蒼樹書房, 1976年。

京都大学教育学部紀要 XXXIII

- 13) 祖父江孝男『文化人類学入門』中央公論社（中公新書），昭和54年，169～171頁。M.ミードは，男性らしさと女性らしさに，先天的な因子があることも十分にみとめている。
- 14) R.ベネディクト，米山訳『文化の型』社会思想社，昭和48年。
- 15) ベネディクトの著書が出てから，数名の研究者が次々とプエブロ・インディアン（ズニ族）の調査をおこなったが，結論は相反する2つのグループに分かれた。ベネディクトと同じ立場に立ったのは，L.タムスンらであり，正反対の結論を出したのは中国の人類学者リー・アンチェらであった。反対派は，ズニ族にも内心強い野心や競争心があり，表面無関心をよそおっているのだと主張した。文化人類学者自身のもつ価値観の相違が調査に投影され，違った結論をみちびき出すことを示した例である。祖父江孝男，前掲書218頁参照。
- 16) R. Linton, Ibid., p. 43～47: 前掲訳書，61～71頁。
- 17) R. Linton, Ibid., p. 48: 前掲訳書，67頁。
- 18) R. Linton, Ibid., p. 52～53: 前掲訳書，71～72頁。
- 19) 江淵一公「文化化と教育」，綾部編『新編・人間の一生』所収，アカデミア出版会，1985年，40～41頁。
- 20) G. W. Allport, Personality-a psychological interpretation, Henry Holt and Company 1937, p. 48: 註摩他訳『パーソナリティ』新曜社，昭和57年，40頁。
- 21) R. Linton, Ibid., p. 84: 前掲訳書，109頁。
- 22) R. Linton, Ibid., p. 112: 前掲訳書，139頁。
- 23) E. フロム，谷口・平坂訳『人間における自由』東京創元社，昭和30年，71～72頁。
- 24) 藤本浩之輔『モーダル・パーソナリティ論』京都大学教育学部紀要第7号，1961，88～110頁参照。
- 25) R. Linton, Ibid., p. 99: 前掲訳書，126頁。
- 26) リントンと共同研究をした精神医学者の A. カーディナーは，リントンの調査データを基礎にして，育児様式，食物事情，など衣食住に関する文化（第一次制度）は，その社会の基本的パーソナリティ構造を媒介として，宗教，タブー，民話といった第2次制度に投射（project）されると考えた。この考え方にヒントを得て，特定の反応型→一般的反応型の形成が投射的（projective）であると考えてみた。
- 27) R. Linton, Ibid., p. 141: 前掲訳書，172～173頁。
- 28) 角田忠信『日本人の脳』大修館書店，1978年，70～145頁。
角田忠信「脳と言語」，『ライフサイエンスにおける言語・意識・生活』所収，共立出版，1986年，24～30頁。
- 29) 田中靖政「現代日本人の主体文化」，『講座現代の心理学 8 文化と人間』所収，小学館，1982年，135～138頁。
- 30) R. Linton, Ibid., p. 76～77: 前掲訳書，99～100頁。
- 31) 藤本浩之輔『子ども文化論序説』京都大学教育学部紀要第31号，昭和60年，5頁。
- 32) 藤本浩之輔，前掲論文，24～25頁。
- 33) G. E. Kneller, Educational Anthropology-an introduction, John Wiley & Sons, 1965, p. 49.

（本学部助教授）